

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど

Ishikawa, Ikuji / 石川, 郁二

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学多摩論集 / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

29

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009600>

法政大学「多摩論集」第29号
2013年3月

テムズ・パスに設置されている ゲートやスタイルなど

石川 郁 二

テムズ・パスに設置されている ゲートやスタイルなど

石川郁二

I. はじめに

テムズ川沿いにある Thames Path を歩いていると牧草地が多い。イギリスのロンドンから列車に乗り、郊外に向かうと、しばらくして牧草地が見えてくる。それは日本の東京駅から郊外に向かう電車に乗ってはいは経験できないものである。

Thames Path をロンドンの都市部から上流へと歩いて行くと、建物が林立している都市部を外れ、住宅地へと到り、その住宅地のはずれ辺りから牧草地が現われ、田園地帯へとつながっていく。

牧草地の中を歩く、と言っても、当然のことながら、牧草地の真ん中を歩くのではなく、牧草地の端を歩いたり、牧草地のテムズ川沿いを歩くことになる。その牧草地には羊が草を食んでいたたり（写真1）、馬や牛が放牧されていたりする（写真2、写真3）。



写真1



写真2



写真3

さらに上流に行くと、牧草地だけではなく、畑も多くなってくる。

放牧されている家畜が、一つの牧草地から次の牧草地に移動できないようなゲートが Thames Path 上には設置されている。それらの中にはキッキング・ゲートやスタイルなどがあり、それらの種類もさまざまである。

さらに、住宅地に囲まれた細道には、小さなゲートが設置されているところがある。公道というよりも、地主たちが私有地の一部を Thames Path に提供しているような細道である。

そのような Thames Path 上に設置されているさまざまな設置物を調べてみる。

II. 1 枚扉のゲート (Gate)

Thames Path を歩いていて、設置されているゲートの前まで来ると、これから牧草地の中、または住宅街の私有地の中を歩く、という少し緊張した気分になる。

昔は多くの家畜が放牧されている牧草地があちらこちらにあったのではないかと思われるが、現在では、よほど上流のほうに行かないと牧草地にいる家畜には出会えない。イギリスでも都市化が進み、住宅が郊外に延びている。公園になっていたり、動物のいない牧草地も多く目についた。

1) 木製のゲート

Thames Path 上にあるゲートでは、観音開きになっているゲートは目につかなかった。1 枚の扉で、その扉が開くゲートである。

このゲートは、木材でできているものと金属でできているものがある。

写真 4 は木製のゲートである。左側にテムズ川が流れている。写真の中央には Thames Path があり、右側には牧草地が広がっている。その Thames Path と牧草地の間に、鉄線が 6 本張り巡らされており、Thames Path のウォーカーが牧草地に進入できないようになっている。木製のゲートは、ゲートの強度を保つために、2 本の材木がクロスして使われている。このゲートは右側が手前に開くようになっている。

写真 5 は牧草地と牧草地の間に設置されているゲートである。テムズ川沿いに

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど



写真4



写真5



写真6



写真7

牧草地はあるのだが、Thames Path 自体はテムズ川から少し離れている。右の門柱の上に付いている丸い形のは、Thames Path を表している標識である。ゲートの形が先ほどの写真4と似ているが、横棒は4本で、斜めにかけている材木は1本である。

写真6は、写真5のゲートより幅が狭い。牧草地と牧草地の間に狭い小川がある。大きい動物だと飛んで渡ってしまうくらいの川幅である。それで、ゲートの左右には有刺鉄線が設置されている。

この橋は主に Thames Path を歩くウォーカー用に設置されている。材木が横木として5本使用されている。上から2本目には、写真では読みづらいが、「PLEASE CLOSE」と黄色い文字で書かれている。「閉めてください」という意味である。明らかに Thames Path を歩いている人に言っているのである。この土地の所有者がこのゲートを設置したのである。

写真7は、先ほどの写真6のものより幅の広いゲートである。このゲートは橋の一方の端に設置されている。下を流れる小川は、先ほどの写真6の小川より幅

が広いので、家畜が小川を飛び越える心配はない。そのため、ゲートの左右に有刺鉄線はない。ウォーカーが橋から落ちないように欄干が作られている。右側の欄干の一番手前に、Thames Path を表わしている丸い標識がここにも付いている。右側を流れているのがテムズ川である。

2) 金属製のゲート

金属でできているゲートにはどのようなものがあるのだろうか。

金属製のゲートも、だいたい木製のゲートと同じような形が多く、金属製のゲートも観音開きのものは Thames Path にはなかった。

写真8は橋の一方の端についているゲートである。右側に、扉を固定する道具の留め具が付いている。左側には蝶つがいがあり、扉のテムズ川側が開閉できるようになっている。横に渡してある金属棒は5本あり、下の3本には動物が通ることができないように網の目状に細い金属棒が付けられている。この網の目状のものは、家畜が移動できないように付けられているだけでなく、これがあるこ



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど

とにより、金属製扉自体の強度も増すことになるのだ。

写真9は橋の上に設置されているものではない。歩いてできている小道が写真でよく分かる。やはり金属の横棒は5本あり、下の3本には網の目状の細い金属棒が付けられている。左側の柵には丸太が使われている。

写真10は、金属の横棒の、下から4本に、格子状の細い金属棒がかけられている。ゲートの左右には鉄線がこれも格子状になっており、一番上には有刺鉄線が張られている。これだけ頑丈に鉄線が張り巡らされているということは、放牧している動物が移動できないように、かなり注意しているのである。

格子状ではなく、縦にだけ金属棒が入っているのが写真11である。このゲートの扉と金属製の柵には魚の模様が付いている。この金属製の魚の模様は、縦の金属棒2本または3本に接している。そのため、見た目の楽しさだけではなく、柵の強度自体にも関係しているのである。このような模様のあるゲートの扉や柵は、他にはほとんど見かけなかった。珍しいものである。

写真12と写真13は、Thames Path のこの区間のそれぞれの端に設置されて

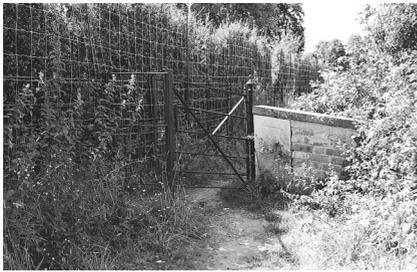


写真12



写真13



写真14



写真15

いるもので、ゲートの扉が斜めに作られている。このようなゲートも珍しい。一方にコンクリート製の低い扉があり、もう一方には幅の狭い鉄製の柵がある。その幅の狭い鉄製の柵は、格子状に鉄線をかけてある金属線の扉に接している。コンクリート製の低い扉と鉄製の柵をうまく利用したのであろう。コンクリート製の低い扉を見ても分かるのだが、地面が少し傾斜している。そのため、傾斜の上のほうの鉄線の柵に合わせてゲートの扉を作ると、扉を閉めた時、扉の下が空き過ぎる。そうすると、そこを通ることができる動物もいるだろう。逆に、傾斜の下のほうのコンクリート製の扉に合わせてゲートの扉を作ると、扉が閉まらなくなってしまう。それで扉の鉄製の横棒自体を斜めに作ってある。横棒は6本で、2本の鉄製の細い板状の棒をクロスして強度を保っている。

写真14は幅の狭いゲートである。一人が通るのがやっと、という幅で、片側が生垣、もう一方は、幅の狭い鉄製の柵があり、その横に木製の柵がある。住宅があり、Thames Path のために広いスペースをとれなかったのである。その影響でゲートも幅が狭くなっている。

写真15は、写真14のゲートに比べてかなり幅の広いものである。農作業の車の出入りができるようになっているのだ。Thames Path を歩いているウォーカーたちは、この幅の広い1枚扉のゲートは使っていない。その左横の扉の付いていないゲートを通り、歩いている人が多いようだ。人が通った跡ができていたので、それが分かる。この扉のないゲートの下に、ぶ厚い材木が2本横に置かれている。これは家畜の通過を防ぐためのものだ。

3)ゲートの留め具

上に述べたゲートの扉が、少し押しただけで開いてしまっては、家畜が移動してしまう。そのために、扉には錠が付いている。ただし、鍵をかけてしまえば、ウォーカーも通れなくなってしまうため、扉を押してもすぐに扉が開かない程度の留め具が付いているのである。

写真16はよく見かける留め具である。同じ種類の留め具を大きく写したものが写真17である。丸い鉄製の棒を横に動かす、つまり、この写真の場合は左方向に動かすと、留め具が外れるようになっている。これは簡単な留め具である。

写真18は、写真17の手で持つ丸い鉄の棒が、途中で横になっている。横に

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど



写真 1 6



写真 1 7



写真 1 8



写真 1 9

動かして留め金から外すのは同じである。構造自体は簡単なものだ。

写真 1 9 は、扉と接している材木に掘ってある穴に鉄製の丸い棒が入り、扉を固定するようになっている。縦になっている鉄製の短い丸い棒を手で上にあげて、引っかかっているものを外し、鉄棒を左方向に引くと、扉と接している材木の穴から、丸い鉄棒が出て外され、扉が開くようになっている。ただし、ここのゲートは穴が穴になっていない。扉を手前に引けば、鉄製の丸棒が、穴のあいている材木から外れてしまい、扉が開く。だから、実質的には、縦になっている短い丸い鉄棒を横に引く必要がない。

横に引いて穴に入れるやり方の錠に写真 2 0 がある。この金属の短い棒を横に引いて扉を開閉するのである。左の小さな板状のものを上にあげ、丸く突き出ている輪っかに手をかけて、横に引くのである。

同じような形式だが、扉に接している材木に穴があいているのではなく、金具が付いているのが写真 2 1 である。扉側の留め具には、平べったい板状の金属棒を使用している。



写真 2 0



写真 2 1



写真 2 2



写真 2 3

板状の金属棒がもっと短いものが写真 2 2 である。湾曲している箇所を手をやって引くのである。

最も簡単なものは、扉に付いている金属の輪っかを、扉のすぐ横に立ててある金属棒に引っかけるだけのものである。写真 2 3 は扉自体も単純で、金属棒だけでできている。このゲートは家畜の移動というよりも、明らかに Thames Path を歩いている人に、私有地だという注意を喚起させるものである。

もう少し複雑な留め具は写真 2 4 のものである。この写真 2 4 のゲートと一対になっているゲート、つまり、Thames Path のこの区間のもう一方の端のゲートなのが、写真 2 5 である。ほとんどのゲートは入っていくと当然出るゲートがある。そのような両方のゲートと留め具は同じ種類のものが使われているのがほとんどである。この留め具は、上にある小さな丸いものを手前に引くと錠が外れるようになっている。

この小さな丸いものは同じだが、扉側に付いているものが板状で、横になっているものが写真 2 6 である。

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど



写真 2 4



写真 2 5



写真 2 6



写真 2 7

上述した丸いものを長く棒状にしたものが、写真 2 7 である。上にある丸いものが小さい写真 2 5 や写真 2 6 のものより、この写真 2 7 のように棒状に長くなっているもののほうが、利用する人にとっては使いやすい。構造は同じで、この長い金属棒を手前に引くと留め金が外れるようになっている。

4) ブライドル・パス (Bridle Path) のゲートの留め具

ブライドル・パスとは乗馬用の道のことである。OED によると、「乗馬用で自動車用ではない小道」となっており、*Longman Dictionary of the English Language* によると「乗馬に適した小道あるいは優先権がある道」となっている。

Thames Path にブライドル・パスがなぜ存在しているかという点、昔はテムズ川を行き来する荷物を運ぶ船を、馬が引っ張っていたのである。上流に向かう船を馬に引っ張らせていたのだ。現在ではもうそんな姿は見られない。

Thames Path を歩いていて、ほとんどの区間がテムズ川沿いに木が植わっているのが分かる。ただし、一部の区間では、牧草地がテムズ川の岸辺まで迫ってお

り、船をけん引するロープの邪魔になる樹木がない箇所はあるが、ほとんどの河岸では、馬に引っ張らすのは無理であるし、現在ではその必要もない。

そのブライドル・パスの一部が Thames Path になったのである。だから、ブライドル・パスと Thames Path が同じ小道を使っている場合があるし、別の道になって分かれている場合もある。同じ道を共同で使用している場合は、現在では当然のことながらウォーカーが優先である。

イギリス南西部のコッツウォールド丘陵にある村の中を横切っている Thames Path を歩いている時、乗馬を楽しんでいる人たちを見かけた。村道を数頭の馬が歩いていた。そのようなブライドル・パスは田園地方では今なお健在である。

乗馬をやっている人たちは、ゲートに来たからといって、いちいち馬から降りてゲートの留め金を外すわけにはいかない。

写真 28 で分かるように、留め金を外すために手で持つところが高くなっており、馬に乗っていても持つことができるようになっている。この扉より上に出ている逆 U 字形になっているところを横に引くと錠が外れる。



写真 28



写真 29



写真 30



写真 31

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど



写真3 2

乗馬用の取っ手はもう1種類あった。写真29のように、手で持つところが逆U字形になっていなく、まっすぐに上に延びているものである。これも逆U字形と同じように横に引いて留め金を外す構造である。

Thames Path に設置されている乗馬用の取っ手があるゲートは、牧場への

入口に設置されているものが多い。

牧場の近くではないが、写真30のように、Thames Path とブライドル・パスが同じところを使用している道に設置されているゲートに、乗馬用ゲートの留め具の取っ手が取り付けられていた。

テムズ川には、ロック (Lock) と呼ばれる閘門 (こうもん) (写真31) があちこちに設置されている。閘門とは「船舶を高低差の大きな水面で昇降させる装置。二つの水門の間に、船を入れる閘室を持つ。船を閘室内に入れたのち水門を閉じ、閘室内の水位を昇降させて出て行く側の水位と同じにしてから船を進める」(『広辞苑 (第五版)』岩波書店) というものである。そのロックへの出入り口に、乗馬用の取っ手が付いている扉のゲートがあった。写真32はハンブルデン・ロック (Hambleton Lock) の出入り口の Thames Path に設置されているゲートの乗馬用逆U字形取っ手のついた留め具である。

Ⅲ. キissing・ゲート (Kissing Gate)

キissing・ゲートとは、辞典によると「(一度に一人しか通れない) 小さな自在門《生垣や柵に設けられるU [V] 字形の入口をもつ木戸》」(『新英和大辞典 (第六版)』研究社) となっている。

このキissing・ゲートも家畜が移動できないように設置されているもので、一度に一人しか通過できない木戸である。恋人たちはしばしの間離れなくてはならず、このゲートのこちら側と向こう側でお互いに立ち止まり、キissをするところ

ろからキissing・ゲートという名前が付いたと、テムズ川上流の Thames Path を一緒に歩いたアラン (Alan) さんというイギリス人から聞いた。

辞典で kissing gate を調べても、なかなか分かりづらいし、イメージできない。さまざまなキissing・ゲートを写真で見よう。

1) 木製のキissing・ゲート

写真33と写真34は同じキissing・ゲートである。写真33はキissing・ゲート内の扉が向こう側になっている。通行人はこちら側からゲート内に入り、左のU字形の囲いの中にいて、写真34のように扉を横へ引く、つまり、写真では手前側に引くと、U字形の囲いの中にいる人は向こう側に出られる、という構造である。

U字形の囲いの中にいて扉を横に引く、ということが牛馬や羊にはできないであろう。もし家畜がキissing・ゲートまで来たとしても、写真33の左のU字形の囲いの中に入ってしまい、身動きがとれず、元へ戻ってくるしかないのである。



写真33



写真34



写真35



写真36

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど

写真35と写真36は同じキissing・ゲートで、テムズ川沿いにある。U字形の囲いの中が先ほどの写真33よりも少し狭い。そして写真36のキissing・ゲートの扉に接する縦になった角材に付いている蝶つがいの位置を見ると、写真33の扉の蝶つがいが付いている位置より、少し下に付いている。そして、U字形の囲いの中の地面が少し上がっていることもあって、写真36のように、扉が土に接触し、U字形の囲いの真ん中で止まってしまっている。このような場合は扉を持ち上げるようにして移動させなければならない。

U字形の囲いの幅と奥行きが少し広いキissing・ゲートが写真37である。この場合はウォーカーにとって、キissing・ゲートを通過するのが楽であるが、自転車も通過できるのである。

歩いている時、サイクリングをやっている若者が、このキissing・ゲートにやってきた。どうするのか、と思って見ていると、彼はサイクリング車の前輪を上を持ち上げた。つまり、自転車を縦に立たせて後輪は地面につけたままで、キissing・ゲートのU字形の囲いの中に入り、扉を横に移動させて、難なく



写真37



写真38



写真39



写真40



写真4 1

キissing・ゲートの向こう側に出
て行ったのである。

写真3 8は、U字形の囲いの幅と奥
行きが狭いキissing・ゲートであ
る。これでは一人ずつしかゲートを通
過できない。

写真3 9はキissing・ゲートに
入る時と出る時が、今までのキissing
・ゲートのように、Thames Path が一直線になっていない例である。こちら
側からキissing・ゲートに入り、U字形の囲いの中に入って扉を横に引き、
出ていく時に、そのまま真っすぐ前に出ていくことになる。つまり、この写真3
9では、キissing・ゲートへの進入とは9 0度右に出ていくことになる。そ
して、キissing・ゲートを出ると、すぐにThames Path は、こんどは左に9
0度曲がっているの、進入時と平行にはなるのだが、一直線上にはなっていない。
キissing・ゲートに鎖が付いているのも珍しい。

ここまで見てきたキissing・ゲートは、人が中に入る囲いがU字形であっ
た。U字形の囲いのキissing・ゲートが多いのだが、囲いがV字形のものも
ある。それが写真4 0である。V字形のキissing・ゲートは囲いの中に一人
しか入れず、幅と奥行きが狭い写真3 8のU字形の囲いのキissing・ゲート
と同じように、一人ずつしか通過できない。背中に少し大きな荷物を背負ってい
る時には、V字形の囲いの中で身動きができない時もある。

写真4 1は自動車道路のこちらから写真を撮ったもので、小さく写っており、
見づらいかもかもしれないが、V字形のキissing・ゲートである。このキissing
・ゲートは木製であるが、右側には金属製扉のゲートが設置されている。こ
の金属製ゲートは幅が広い。この幅の広い金属製ゲートは農機具や自動車の通過
用である。人間は狭いV字形キissing・ゲートを通るのである。

2) 金属製のキissing・ゲート

金属製のキissing・ゲートはほとんどすべてがU字形か丸形であった。

写真4 2はU字形のキissing・ゲートで、扉には横に5本の金属棒がある。

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど



写真4 2



写真4 3



写真4 4



写真4 5

斜めに1本、金属棒を付けて補強してあるが、扉を動かすとヒラヒラとしなるような感じがして、扉の面の強度が弱いようだ。このキissing・ゲートは一度に一人しか通過できない。

しかし、U字形の囲いの奥行がある写真4 3は複数の人が入ることができる。これでは、なぜキissing・ゲートと呼ばれることになったのかという理由を考えれば、もはやキissing・ゲートとは言えないかもしれない。写真4 2は牧草地の中に設置されており、ウォーカーだけのためにある。しかし、写真4 3のキissing・ゲートは、キissing・ゲートの向こう側にベンチが何脚も設置されているのが写真に写っている。公園か、近くの人たちの憩いの場所になっているようである。つまり、写真4 3は Thames Path を歩くウォーカーだけではなく、近くに住む人たちが散策や散歩のために、家族で利用したり、複数の知人で利用したりするのであろう。だから、キissing・ゲートのU字形の囲いも、複数の人が一度に利用できるようになっているのではないだろうか。扉の金属の横棒は写真4 2と同じ5本だが、下の3本は縦の金属棒で補強されている。

金属の棒も丸い棒が使われており、写真42のキissing・ゲートよりも強度があるように思われる。

U字形の囲いの中が狭いキissing・ゲートは写真44である。このキissing・ゲートは住宅と住宅の間を通っている Thames Path に設置されているものであり、ここまで見てきたキissing・ゲートとは趣が違ふ。金属の棒を縦に使い、どこかの館の庭園に通じているような感じを与える。

丸形のキissing・ゲートは写真45である。囲いの部分が丸くなっている。金属の扉の下には、網の目状になっている金属棒が付いている。この丸形のキissing・ゲートの扉には留め具が付いているものが多い。丸形の囲いの片方の端ともう一方の端の幅が大きいので、羊などが扉を押してゲートの囲いの中に入ってしまう場合がある。その場合に、扉が中途半端に真ん中あたりで止まってしまうと、そのまま反対側に出ていける可能性がある。囲いが丸形で、囲いの中の空間が大きいために留め具を付けている。そして、U字形やV字形のキissing・ゲートのように、扉の一部が囲いの柵と重なり合い、扉が止まるのではない。



写真46



写真47



写真48

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど

1枚扉のゲートのようになっており、その横に丸形の囲いが設置されていると考えられないこともない。写真46を見ればそのことがよく分かる。大きい丸形の金属製キッキング・ゲートにはほとんど留め具が付いており、U字形やV字形の木製キッキング・ゲートとは、構造上、少し違うのである。

写真47は、幅の広い1枚扉のゲートの横に設置されている金属製のキッキング・ゲートである。1枚扉のゲートは農機具や自動車の出入り、または家畜を移動させるために使用され、ウォーカーはこのキッキング・ゲートを使用する。このように丸形の囲い内の空間が大きい場合は、一人ずつではなくとも2人一緒に入ることができるため、恋人たちは離ればなれにならなくてもすむであろう。

囲いや扉などの金属棒が縦になっているのが写真48である。このキッキング・ゲートには留め具が付いていない。つまり、扉は丸形の囲いの内側で止まるのである。丸形の金属製キッキング・ゲートだが、上に述べたキッキング・ゲートより、囲いの中が狭い。このキッキング・ゲートは、金属製の1枚扉のゲートの横に付いており、ここでは両方とも使用されているようだ。

IV. スタイル (Stile)

スタイルとは「踏み段」のことである。研究社の『新英和大辞典(第六版)』によると「踏越し段《牧場などの柵や扉などに、人は乗り越えられるが家畜は通さないために設けた階段》となっている。踏み段を上がり柵を乗り越えて反対側に出るのである。

Thames Path に設置されているスタイルは1段のものと2段のものがある。構造は簡単なもので、単に踏み段の数ということなら、写真は2枚あれば足りる。しかし、スタイルの形や、そのスタイルの設置方法にいろいろな種類がある。

1) 1段のスタイル

まず1段のスタイルを見ていこう。

写真49は橋の出入り口、つまり、橋の端にあるスタイルである。家畜が橋を渡ることができないように、木材の板が3枚、横向きに留めてある。ウォーカー

石 川



写真 4 9



写真 5 0



写真 5 1



写真 5 2



写真 5 3



写真 5 4

はそれを越えなければ橋には入れない。そのために、スタイルが設置されている。橋の上から撮ったものが写真 5 0 である。ウォーカーは一人ずつスタイルに乗って、向こう側に乗り越えていく。

幅の広い 1 枚扉のゲートの横に設置されているスタイルもある。写真 5 1 は簡単な作りのスタイルである。スタイルの板が柵と直角に置いてある。金属製の 1 枚扉のゲートを開ける手間を省いているのである。

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど

写真5 2も金属製のゲートの横に設置されているが、1枚扉のゲートは写真5 1よりも幅が狭いものである。柵は鉄線で作られている。柵を乗り越えやすいように1本の材木が、格子状の鉄線の柵の上に、横に使われている。この柵は鉄線が格子状に張られている構造なので、材木がないと、柵を越える時に格子状の鉄線を壊す恐れがある。そのために、材木を使って、安全に越えられるようにしたのである。

写真5 3は丸形の金属製キッキング・ゲートの横にスタイルの付いた柵がある。どちらか一つが設置されていればよいはずだが、なぜだかキッキング・ゲートと一緒に設置されている。

見た目もシンプルなもの写真5 4である。小柄な人なら、丸い金属棒で囲まれた中をくぐれば通過できそうであるが、イギリス人にとっては身を屈むのはきついかもしれない。

1) 2段のスタイル

2段のスタイルには2種類ある。板がクロスしているスタイルと、平行になっているスタイルである。

写真5 5は2枚の板がクロスしているスタイルである。柵のこちら側と向こう側が同じ高さの場合は、このような形で2枚の板が中央でクロスしている。

写真5 6も2枚の板がクロスしているスタイルであるが、柵を乗り越えた向こう側が自動車の通行できる道路なので、先ほどの写真5 5とは異なるところがある。写真5 5は2枚の板が、両方の板の真ん中でクロスしているが、写真5 6は道路側とは反対側のこちら側に、2枚の板のクロスしている中心がある。自動車



写真5 5



写真5 6



写真57



写真58



写真59

道路の端を通行する人や自転車の邪魔にならないようになっており、自動車道路側に板をあまりはみ出してはいない。そして、自動車道路側とこちら側とでは地面に高低差があるため、このスタイルは、こちら側では2段のスタイルになっているが、向こうの自動車道路側では1段のスタイルである。

2枚の板が平行で階段状になっているスタイルが写真57である。どちら側からでも越えやすいように、スタイルの板の真ん中に柵がくるように設置されている。

写真58は金属棒の柵を乗り越えるために設置されているスタイルだ。このスタイルがなければ、ウォーカーは金属棒に足をかけて乗り越えてしまうであろう。

写真59は2段になったスタイルだが、橋の入口の地面が狭いのと、地面が右側に下がっておりテムズ川の水位が少し上昇しただけで、通行できなくなる恐れがある。そのため、1段目と2段目の板がT字形になっており、左側の高い地面の方からスタイルの板に上りようになっている。板が狭いと上りづらいので、何枚かの板が使われている。

3) 扉なし一人用V字形ゲート

家畜が自由に通過するのを防ぐために、Thames Path 上に1枚扉のゲートやキッキング・ゲートは設置されているが、扉がないもので家畜が自由に通過するのを防ぐものがほかにもある。これは本当に一人ずつしか通過できない。それを「扉なし一人用V字形ゲート」と言うことにする。

この「扉なし一人用V字形ゲート」にも、木製のものと金属製のものがある。木製の「扉なし一人用V字形ゲート」の多くのものは橋の入口に設置されている。それも幅の狭い橋である。

写真60は小川に渡してある橋に設置されている「扉なし一人用V字形ゲート」である。橋といっても簡単な作りの橋で、2本の長い角材に厚い板を横向きに打ちつけ、手すり用に金属のパイプを取りつけてあるだけのものだ。「扉なし一人用V字形ゲート」が地面よりも1段高くなっているので、上がり段があり、その段はスタイルと言えないこともない。「扉なし一人用V字形ゲート」の内側から撮ったものが写真61である。



写真60



写真61



写真62



写真63

石 川

写真62は橋の形が少し湾曲し、橋の真ん中が高くなっている。橋の端のコンクリートの土台以外はすべて木製で、手すりも木材である。写真63で分かるように、テムズ川が氾濫しても、橋自体は水の中に没することがないように、橋の端のコンクリート土台が高くなっている。高くなっているため、「扉なし一人用V字形ゲート」の前に階段が2段ある。この「扉なし一人用V字形ゲート」の前の階段もスタイルの一種と言えなくもない。

写真64は明らかにスタイルと言える踏み段があるものだ。これも簡単な構造の橋の入口に設置されていた「扉なし一人用V字形ゲート」である。

写真65は金属製扉のゲートの横に設置されていた「扉なし一人用V字形ゲート」である。左にある1枚扉のゲートには小さな車輪が付いている。ゲートを動かす時に動かしやすいように車輪があるということは、ゲート自体が重いので、開けると扉が傾くのであろう。ウォーカーには女性もいるので、女性のウォーカーが一人で動かすのは大変である。それとウォーカーが1枚扉のゲートを常時動かしていると、ゲート自体が壊れやすくなるのだろう。



写真64



写真65



写真66



写真67

金属製の「扉なし一人用V字形ゲート」がある。写真66も金属製1枚扉のゲートの横に設置されているものだ。乗り越える時に足を置くところは少しあるが、それはスタイルとは言えない。このような金属製のものはあまり多くはない。

「扉なし一人用V字形ゲート」ではなく「扉なし一人用逆V字形ゲート」というか「扉なし一人用ハの字形ゲート」といえるものが写真67である。これは、今までに掲載した「扉なし一人用V字形ゲート」のように、ゲートを跨いで向こう側に越えるというものとは違う。一人一人通過せざるを得ない、ということは同じなのだが、この写真67の場合には、自転車やベビーカーなども通過できるようになっている。この地点では、ベビーカーを押して散歩している人を見かけた。その場所に適したものが設置されているのが分かるのである。

V. その他のゲートや設置物

今までに述べたゲートやキッシング・ゲートとは少し違うものがある。家畜の移動を防ぐために設置されているもので自動車は通行できるものや、自転車などが速い速度で走るのを防ぐために置いてあるものである。

1) その他のゲート

写真68の木製のゲートは、単なるゲートの横に、キッシング・ゲートのU字形の囲いをあとから設置し、ゲートの扉に新たに幅の狭い扉を付け足したものである。

写真69は固定のゲートで、金属でできているコの字形とT字形の柵が設置されている。ウォーカーは横に並んでこのゲートを通過することはできないが、縦に並べば複数の人でも一緒に通過できる。キッシング・ゲートのように、2人が一度離ればなれになる必要はない。この写真69は家畜の移動を防ぐためというよりも、Thames Path を走っている自転車の速度を止めるために設置されているようである。サイクリングをやっている人は、ここで一度、自転車から降りなければならない。

写真70は、両側に扉のある小道に設置されているものだ。この小道には自転



写真68



写真69



写真70



写真71

車のマークがある。自転車通行可で、歩行者だけではなく、サイクリングをやっている人もこの小道を使ってよい。しかし、スピードを出してこの小道に入って来られないように、鉄パイプで柵が作られている。

写真71も、ウォーカーとサイクリングをしている人の両方が利用できる。手前の角材の上に、黄色い Thames Path のマークと、その下に自転車と歩行者の両方が通行できると言うマークがある。自転車と歩行者の表示の下に書いてある英語は「Pedestrian Priority」とあり、「歩行者優先」である。

この写真71の道は自動車も通れるようになっていて、手前から2列目にある横に長いゲートは開閉できる。これは Thames Path を整備するトラックなどが通行できるようになっているのである。

テムズ川で開催されるオックスフォード大学とケンブリッジ大学のボートレースを見に行った時、テムズ川沿いの Thames Path を白バイ、と言っても、白ではなく青だったが、警察のオートバイが Thames Path をゆっくりと移動し、警備していた。当時はテロが多い年だったため、警備を強化していたのだ。もちろん、

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど



写真7 2



写真7 3



写真7 4



写真7 5

その区間の Thames Path はパトカーでも通行できるだけの幅があった。

牧草地とテムズ川の間で作られている Thames Path が写真7 2である。この写真は左側から、テムズ川、Thames Path、そして牧草地と写っているのも、とてもわかりやすい。右側の牧草地には鉄線で入れないようにになっている。写真4には扉のあるゲートがあったが、この写真7 2には扉がない。扉のないゲートということは、家畜の移動を心配する必要がないということである。そして、ウォーカーだけではなく、サイクリングを楽しむ人たちも通行できるのである。

「扉のないゲート」とは言えないようなものが写真7 3の中に写っており、1枚扉のゲートと石組みの壁の間に設置されている。1枚扉は横の鉄パイプに鎖で縛られているために開けることができない状態だ。現在では、牧草地の家畜の移動とか、自動車の通行というものがほとんどないのであろう。1枚扉のゲートの横に板状のコンクリートが2本、横に置かれている。そこに扉はない。Thames Path を走っている自転車をいったん停止させるために、そのまま置かれているようである。

このような「扉のないゲート」では、前に出した写真15にそのゲートがある。写真15の左側に写っている扉の付いていないゲートは、下に大きな材木が横に置かれていた。家畜はこのぶ厚い材木をまたいで通過しなければならず、それも2本置かれているために、通過しづらいのである。

ロックの出入り口にあるゲートの中には、扉が鉄棒の留め具で地面に固定できるものがある。写真74のゲートでは、歩いている人はこの写真の状態で行ける。そして、ロックへ荷物を運搬する自動車などのためには、鉄棒を上へ上げれば、このゲートを開けることができるようになっている。ここに書かれている掲示の英語は「Notice No cycling past this point」（「警告 サイクリングでこの場所は通過できない」）となっており、自転車に乗ったまま進入はできないのだ。

写真75も同じくロックの出入り口にあるゲートである。ここの英語の掲示には「Notice Please Dismount and walk through lock」（「警告 自転車などは降りて、歩いてロックを通過してください」）とあり、自転車に乗っている人は、自転車を降りて押していけばロックに入ることができるのである。

2) キャトル・グリッド (Cattle Grid)

キャトル・グリッドとは「家畜脱出防止溝《柵囲いの切れ目に設けてゲートの代用にする》」と研究社の『新英和大辞典(第六版)』に記載されている。キャトル・グリッドという言い方はイギリスでの言い方で、アメリカではキャトル・ガード (Cattle Guard) と言う。

キャトル・グリッドとは、道路に四角い溝を掘り、その上に金属棒を、ある程



写真76



写真77

度の間隔をあけて、何本も並べているものを言う。自動車はその上を通ることができるが、家畜が通ろうとすると、金属棒と金属棒の間に脚が入ってしまい、うまく通過できないのである。そのため、家畜はキャトル・グリッドの手前で、立ち往生してしまう。家畜の移動や逃亡を防ぐために設置されている設備である。

キャトル・グリッドは、遠くから見ては分からない。地面の溝の上に金属棒が横に設置されているため、近くにきて初めて分かる設備である。

写真76にはゲートの扉はない。この道はロックへ通じている道である。自動車が通るために、キッキング・ゲートなどは設置できない。1枚扉のゲートを設置してもよいのであろうが、自動車の交通量のことが一番大きな理由であろう。ロックの人たちや Thames Path のウォーカーも通るので、キャトル・グリッドが設置されているのであろう。家畜はここまで来て、このキャトル・グリッドの上を歩くことができないのが分かる。だから、キャトル・グリッドは、ブライドル・パス上には設置されていないのである。

このキャトル・グリッドは Thames Path 上に多くはなかったが、他の場所にも設置されているものがあつた。写真77は扉の付いているゲートも一緒に設置されているものである。扉は開けっ放しになっていた。

VI. 壊れているもの、使われていないもの

上に述べたいろいろなゲートや設備も、すべての物の整備が完全に行われているわけではない。壊れたままのゲートもある。

例えば、写真78である。これは1枚扉のゲートであるが、壊れている。

写真79、写真80、写真81は扉を止めるための留め具が壊れているか、扉の留め金と、その留め金を受ける方の金具が一致なくなっているのである。しかし、この写真のように、ひもや鎖などが掛けてある場合は、まだゲートとして使われているということが分かるのである。

使われていないゲートもある。写真82は、1枚扉のゲートはあるのだが、本来その横にあるべき柵がないのである。昔は柵があつたのであろう。

木製キッキング・ゲートにも、このような例はある。写真83の木製キッス



写真78



写真79



写真80



写真81

キング・ゲートは壊れているわけではない。しかし、やはり、このキッキング・ゲートの横にあるべき柵がないのである。柵がなく、横を自由に通行できるのであれば、わざわざキッキング・ゲートを通過する必要もない。

金属製キッキング・ゲートで扉がないものがあった。写真84である。この金属製キッキング・ゲートの左右には頑丈な鉄柱が横になって設置されているので、扉がないだけの問題なのだか、家畜の移動を心配する必要がもはや無くなったのかもしれない。

スタイルにも現在は使用されていないものがあった。写真85を見れば分かるが、植物が繁茂していて、人が通っている跡がない。このスタイルにも横にあるべき柵がなく、スタイルだけが取り残されているのである。

このように、Thames Path といってもすべての設置物が整備されているわけではない。そして、それぞれの設置物も、設置した目的を失えば、つまり、牧草地としてもはや使用されていないところでは、壊れてもそのまま放置されており、時代の変化に取り残されているようである。

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど



写真 8 2



写真 8 3



写真 8 4



写真 8 5

VII. まとめ

Thames Path に設置されているゲートやスタイルなどを見てきたわけだが、これらの設置物は、テムズ川沿いにある土地の利用方法と関係があるものばかりである。そして、羊や牛馬が牧草地から勝手に外に出られないように設けられているゲートやスタイルなどは、家畜の移動防止だけの目的で設置されているのではなく、Thames Path のウォーカーが通行できるようにも考えられた物であることが分かる。

スタイルや、斜めになっている金属製のゲートの扉などを考えれば、それぞれの設置物は設置されている場所の地形をも考慮に入れ、それぞれの場所に適したものが作られていることが分かる。

これらの設置物を見ていくと、Thames Path のウォーカーのために設置されている物と、ウォーカー用というよりは乗馬を楽しんでいる人たちのブライドル・パス用の物や、自動車のために設置され、それをウォーカーも利用しているキャ

トル・グリッドのような設備もある。

ロンドンという大都市、郊外の住宅地、そして、牧草地や畑が広がっている田園地帯を通っている Thames Path には、そこに住んでいる人々、Thames Path のウォーカー、そして自然との共存共栄ということを考えて、さまざまな物が作られているのである。

そこに住んで生活している人々を排除するというのではなく、逆にテムズ川沿いを歩きたいという人々の望みを排除することでもない。そういう極端なことではなく、住民や農場主の協力と、Thames Path ウォーカーの協力が一つになったところに、この小論で取り上げた設置物が置かれる理由があり、それが活用されているのである。

テムズ川沿いの Thames Path を楽しみながら歩くために、住民と一緒にウォーカーがあるということを、我々はもっと考え、見習うべき点が多くあるように思われてならない。

結局、Thames Path 上のゲートやスタイルなどは、その土地に住んでいる人々と、Thames Path を歩きたいという人々の考えが折り合った結果できた設備であり、テムズ川沿いの生活やその地区に適した設置物であることが分かるのである

以上

(この小論は、法政大学の 2007 年度在外研究により出来たものである)